

遠くて近い？

早稲田大学教授
森山卓郎 もりやま たくろう

『枕草子』で最もよく紹介される部分といえば「春はあけぼの」。確かにいい文章だ。が、『枕草子』の魅力をこれだけで判断してしまうのはよくない。

まず、注目すべきは「明るさ」。清少納言の主人である中宮定子は、その父、関白道隆の死後、実家（中関白家）の没落を経験する。権力闘争の相手は、叔父の道長。落ち込むことも多かったはずだ。そんな中で、清少納言は昔の栄光を思い出しつつ、中宮を賛美し、ひたすら明るい。「春はあけぼの」も、周囲のウケをちよつと意識して、少し意外なところをついているように私には思える。

『枕草子』には、「近うて遠きもの」という章段と「遠くて近きもの」という章段がある。次はその中の例。「①思はぬはらから・親族の仲（大切に思わない兄弟や親戚の仲）、②鞍馬のつ

づらわりといふ道（曲がりくねった坂道）、③極楽、④師走のつごもりの日、正月のついたちの日のほど（大晦日と元日）、⑤人の仲（男女の仲）」。「このうち「遠くて近い」のはどれでしょう？——正解は③と⑤。クイズにもなる。

「をかし」もいろいろ。旧暦九月の雨上がり。萩が露で重そうだったのに、ちよつと日が昇ってきて、露が落ちて枝が動いて、誰も手を触れないのにさつと枝が跳ね上がるのが「をかし」という。さらに、こんなことは他人には少しも面白くないだろうと思うのもまた「をかし」と続ける——「すこし

日たけぬれば、萩などの、いと重げなるに、露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬに、ふと上さまへあがりたるも、いみじうをかし。と言ひたる事どももの、人の心には、つゆをかしからしと思ふこそ、またをかしけれ」（九月ばかり夜一夜降り明かしつる雨の）。清少納言は「を

かし」が大好き。

意外な「をかし」もある。十八、九歳くらい髪の毛美しく長く、ぼつちゃり系の色白のかわいく見える美人（当時の美人の典型）が、すごい歯痛で、垂らした髪もぬれるほど泣いて、乱れかかるのも知らず、真っ赤な顔で痛い所をおさえて座っているのも「をかし」だ——「十八、九ばかりの人の、髪いとうるはしくて、たけばかりに、裾いとふさやかなる、いとよう肥えて、いみじう色白う、顔愛敬づき、よしと見ゆるが、齒をいみじう病みて、額髪もしとどに泣き濡らし、乱れかかるも知らず、面もいと赤くて、おさへてゐたるこそ、いとをかしけれ」（病は）。これも「をかし」かい？

千年前の作品ではあるが、暗い現実に向つかのように、生身の人としての思い、観察、経験が書かれている。「枕草子」も、そう、私たちにとって「遠くて近い」！